高校再任用率、今年も低迷！
特別支援はV字回復・過去最高！

道教委が今年度の再任用率を明らかにしました。高校教諭では定年退職数１８３名に対して、再任用申込数１３３名、再任用者数は１０３名で再任用率は７７．４％。急減した昨年よりは持ち直したものの、小中学校・特別支援がいずれも９０％台の再任用率であること、定年退職者数比でみると５６．３％が、定年延長されると、教職５０５号通知でＣＤ地域２校経験がなければＡ群での再任用ができないとされていましたが、引きつづきＡ群の同一校で勤務することが可能になるなど、現在の再任用制度を適用されてきた職員との間に明らかに格差が生じてしまいます。再任用を希望する教職員全員の雇用を確保することが、定年延長の「代替措置」としての再任用制度には求められます。道高教組は人事異動要領の改訂にあたって、改めて教職５０５通知の廃止を道教委に求めています。

所属	高等学校 定年退職者数	再任用申込者	再任用者数 総数	フル	短時間	任用率	特別支援学校 定年退職者数	再任用申込者	再任用者数 総数	フル	短時間	任用率	小学校 任用率	中学校 任用率
校長	31	17	10	9	1	58.8	10	8	7	7		87.5	75.0	73.3
教頭	2	2	2	1	1	100.0	1	1	1	1		100.0	100.0	100.0
教諭	183	133	103	90	13	77.4	51	33	31	26	5	93.9	92.6	90.5
養護教諭	18	8	8	8		100.0	6	2	2	2		100.0	100.0	100.0
栄養教諭						#DIV/0!	1					#DIV/0!		
事務職員						#DIV/0!						#DIV/0!	95.0	100.0
実習助手	9	5	4	3	1	80.0	7	7	7	2	5	100.0		
寄宿舎指						#DIV/0!	18	8	8	8		100.0		
計	243	165	127	111	16	77.0	94	59	56	46	10	94.9	90.8	89.9

再任用率の変遷

	高校 任用率	高校 再任用/定年	特別支援 任用率	特別支援 再任用/定年
2019	77.4%	56.3%	93.3%	60.8%
2018	71.9%	55.9%	70.8%	38.6%
2017	86.0%	61.6%	82.4%	59.8%
2016	74.2%	55.7%	92.9%	59.1%

高校教諭再任用率は９０％を越えたことがない。

道教委が今年度の再任用率を明らかにしました。高校教諭では定年退職数１８３名に対して、再任用申込数１３３名、再任用者数は１０３名で再任用率は７７．４％。急減した昨年よりは持ち直したものの、小中学校・特別支援がいずれも９０％台の再任用率であること、定年退職者数比でみると５６．３％に留まっていることをみても、依然低迷していると言えます。特別支援学校教諭は、定年退職数５１名に対して、再任用申込数３３名、再任用者数は３１で再任用率９３．３％と、一転してＶ字回復し過去最高となりました。

この秋にも定年制延長の法案が国会で審議される予定です

働き方改革と授業時間確保の矛盾噴出
文科省のこれまでの指導が破綻

野放しにされ続けてきた教職員の長時間過密労働。部活動問題やブラックな学校職場の実態を何とかしなければならないとの世論が広がるなか、文科省は今年３月１８日に「学校における働き方改革に関する取組の徹底について（３０文科初第１４９７号）」を発出しました。そこには「各学校の指導体制を整えないまま標準授業時数を大きく上回った授業時数を実施することは教師の負担増加に直結するものであるから、このような教育課程の編成・実施は行うべきではない」「標準授業時間を踏まえて教育課程を編成したものの災害や流行性疾患による学級閉鎖等の不測の事態により当該授業時数を下回った場合、下回ったことのみをもって学校教育法施行規則５１条及び別表第１に反するとされるものでない」と、無理な授業時数確保や教育課程編成について踏み込んだ物言いをしています。これを受けて３月２９日には文科省初等中等教育局長通達「平成３０年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査の結果及び平成３１年度以降の教育課程の編成・実施について（３０文科初第１７９７号）」で、「平成３１年度以降の教育課程の編成・実施」について以下のように述べています。

「災害や流行性疾患による学級閉鎖等の不測の事態に備えることのみを過剰に意識して標準授業時数を大幅に上回って教育課程を編成する必要はない」、「標準授業時数を大きく上回る授業時数を確保している学校においては、児童生徒の学習状況や教職員の勤務状況、当該校における近年の休校や学級閉鎖などの状況を考慮しつつ、平成３１年度以降の年間授業時数計画等を今一度精査し、必要な場合には、授業時数の見直しなどの措置をできるだけ早い段階で講じること」など、これまでの異常な教育課程締め付け、授業時数確保圧力を軌道修正する内容となっています。教職員の定数増をすすめずに学校５日制を実施したことや多様な教育課程を編成させるように締め付けを続けてきたことで、教職員の多忙さが限界を超えてしまった現状を文科省が認めざるを得なくなったと言えます。

心理的にも物理的にも教職員がゆとりをもって子どもたちを向き合うことができるように「働き方改革」を進める必要があります。それぞれの学校で、このような通達が出ていることを管理職とも確認して、目の前にいる子どもの現実から出発する教育課程づくりをすすめてみませんか。

春の学習交流集会
どの子にも発達の芽がある！
確かめ合った1日

５月２５日、高教組「障害児学校部」と道教組「障害児教育部」主催の「春の学習交流集会（はるがく）」が開催されました。講師は、長年にわたり大阪市で小学校の障害児学級に携わってきた大島悦子先生。「生活の事実から子どものねがいを育てる」のテーマで、前半第一部は「発達障害と向きあう～わたしってヘン？わたしは自閉症」、第二部は「友達が心に灯ったとき、『ごめんなさい』のことばが」と題する講演でした。

知的な遅れのないえい子が、日常生活においてイライラしたり混乱して辛いのは「自閉症」のせいだと知って嘆き、しかし「自閉症」と一生付き合っていかなくてはならないのだと気が付いて、「自閉症」を知る授業を要求。人との違いを認め、自分を見つめて整理していく過程は、周囲の人とつながりながら自分を育てていく姿であり、えい子の口から出る「しんどい」という言葉は、自己認識と自分の抱える困難さの理解のきっかけとなる大切な言葉でした。

「どうせ私なんて」と自己否定ばかりだったこゆきが、友達に「ごめんなさい」を言えるようになったのは、楽しい思いやしんどい思いを共有できる友達に出会い、失いたくない友情、修復したいと思える関係が培われたからこそ。「こんなときは何て言う？」などのソーシャルスキルで身に付けたのとは全く異なる「ごめんなさい」です。

私たち教員の仕事は「人格の完成」ですが、普段それとかけ離れたことをしていないか、「子どもの育ち」「発達の保障」とは何か、そしてそれに寄り添っているか、改めて考えさせられた講演でした。

講師の大島先生を囲んでの交流会でも、いろんな質問に答えていただきました。

また、現在のインクルーシブ教育に関わって、「みんなと一緒の場」が強調されて学ぶ場が限定され、障害をもった子ども自身の「豊かな育ち」が軽視されていること、そもそも「ナショナルミニマムは達成されている」という現状認識がおかしい、というお話があり、問題点について再認識することができました。

会場からの質問や悩みにも丁寧に答えてくださった大島先生を見て、児童生徒が発信するメッセージを汲み取り、寄り添うことの大切さを改めて感じた一日でした。

伏見支援学校　谷代晃子

核兵器廃絶願って700人がパレード！
2019 国民平和大行進

「原子力は要らねえ　危ねえ　欲しくない」とサマータイムブルースで歌った忌野清志郎が亡くなったのがちょうど10年前の5月でした。取り立ててファンではないものの、その曲が入ったアルバムは私の愛聴盤でした。

鉄腕アトムで原子力に未来を感じて育った私は、20代でこの曲によって現実の不条理に気付かされ、目先の利益にとらわれる政治と経済に深く憤りを感じました。

今年も5月18日に札幌の国民平和大行進が核兵器のない世界を目指して行われました。北海道では5月5日に礼文島を出発して8月4日まで広島を目指し通して行進する方と一緒に札幌の街を5コースに分かれて、原子力への不安、今の政治の危うさや平和な未来を訴えました。

雨天の昨年とは打って変わって、五月晴れながら記録的な暑さが続いた中での行進でしたが、人通りも多くたくさんの方にアピールできたと思います。

子どもたちの教育よりもミサイルや戦闘機にお金をかけて核融合をまだあきらめない。そんな私たちの国の未来の平和に不安を感じてしまいませんか？平和のために行動しましょう！

手稲養護学校　桑原岳夫